

ジャン・カルヴァン、クレマン・マロとユグノー詩編歌*

バーセル大学教授 オリヴィエ・ミエ
和田光司** 訳

ユグノー詩編歌は、十六世紀フランスの集団的な作品であり、それにとりわけ貢献したのは、宗教改革者のジャン・カルヴァン、次に詩人のクレマン・マロ、そしてテオドール・ド・ベーズです。十六世紀から今日に至るまで、ユグノー詩編歌は、聖書の詩編にある150の祈禱文を含んでいます。

これには、ルネサンス期のフランス詩の特徴が著しく認められますが、単にフランス語にとどまることなく、英語、オランダ語といった他の言語の改革派教会も、すぐにこれを、自国語に訳して取り入れました。

ユグノー詩編歌は、三つの視点から分析するに値します。第一に、「礼拝」のための作品としての観点、すなわち、プロテスタントによる新しい礼拝の確立という、明確な宗教的目的のために作られたものである、という観点です。カルヴァンの果たした重要な役割というのは、特にこの点に関するものです。次に、「ことば」としての、また「詩」としての観点です。それについては、特にクレマン・マロの役割を強調すべきでしょう。最後に、「音楽」作品としての観点です。

I. 「礼拝」のための作品としての観点

聖書の詩編の使用は、十六世紀の宗教改革以前にも、すでにキリスト教の儀式の伝統の一部をなしていました。十六世紀に変わったことは、それを俗語といわれる言語、すなわちフランス語ですが、これに置き換え、それを詩の形にしたことです。

この根本的变化は、それと結びついた、もうひ

とつの変化をともなっていました。俗語に直されたこれらの詩編は、全信徒によって教会の礼拝で歌われるためのものだったのです。

A. 宗教改革以前

西ヨーロッパ（この場合、ポーランド、ハンガリー、クロアチアなども含みますが）、この西ヨーロッパは、宗教改革までローマ・カトリックの儀式に留まっていた。それはラテン語でなされていたのです。詩編もラテン語で読まれ、また歌われました。そのため、これを歌うことができるのは、司祭のみでした。

他方、詩編は修道士の聖務日課（これは1日5回持たれる儀式ですが）の一部でもあり、これもラテン語でなされました。そのため、詩編を歌う、あるいは静かになえるということは、特に修道生活に特徴的なものだったのです。

一般に、詩編を読んだり歌ったりすることは、平信徒にとっては、修道士の生活を真似ることを意味しました。修道士の生活は上のランクに属するものであり、平信徒の生活より、そして司祭の生活さえよりも完全である、と考えられたのです。最後に、音楽についていえば、詩編の歌唱は、普通は他のラテン語の儀式と同様に、グレゴリオ聖歌（かつての教皇、グレゴリウスの名にちなんだもの）と呼ばれるものによってなされました。この音楽は学問的な性格のものであり、それゆえ平信徒よりは司祭のものでしたが、司祭もしばしば無知であったので、結局、修道士に特徴的なものとなったのです。これらの事実を要約すれば以下ようになります。詩編は一般信徒の宗教文化の一部をなすものではありませんでした。宗教改

*キーワード：ジャン・カルヴァン、クレマン・マロ、ユグノー詩編歌

**前関西学院大学社会学部兼任講師、現聖学院大学政治経済学部専任講師